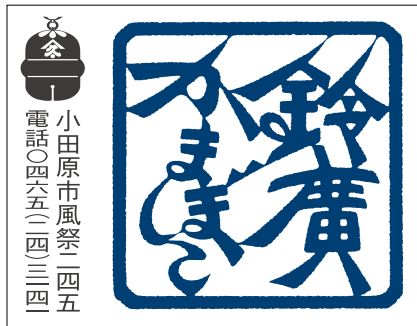
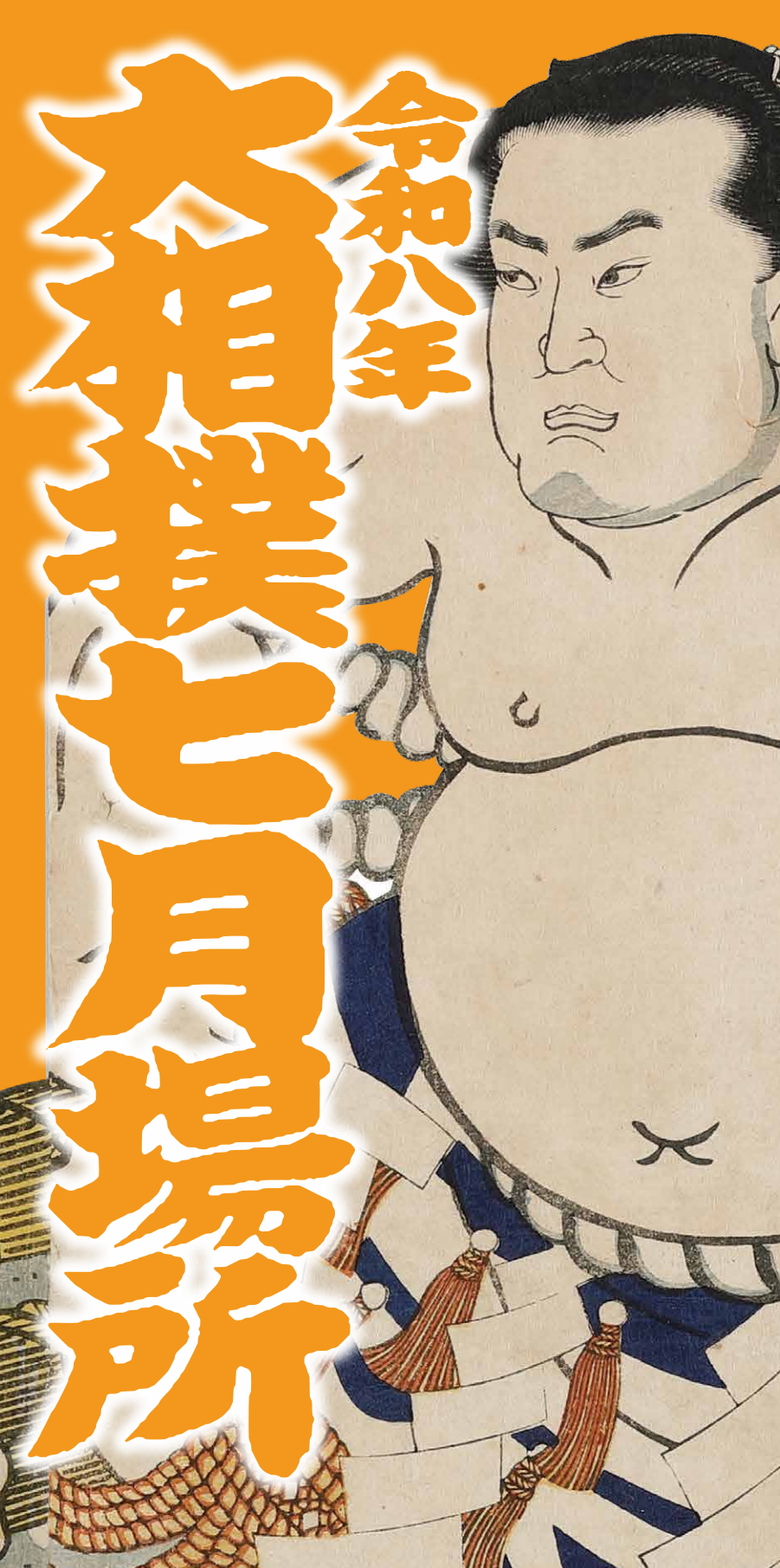




きらびやかな衣装をまとって土俵に立ち、凛としたたたずまいと きびきびした所作、そして張りのある声で土俵の進行を司る行司 は、さまざまな役割を果たし、神事や伝統文化としての大相撲を支 える、なくてはならない存在だ。

行司には「木村」「式守」の二家があり、四股名のように「木村〇〇」 または「式守〇〇」という名前を持つ。力士と同様に「序ノ口格」「序 二段格」などの階級があり、行司界の横綱にあたる最高位が「立行司 (たてぎょうじ)」。番附が上がるにつれて名前を変えることも多い。 代々受け継がれる名もあり、中でも「木村庄之助」「式守伊之助」は、 二人の立行司にのみ許される、権威ある名前だ。

行司の衣装はおもに武家社会で用いられた装束で、階級によって 軍配の房などの色が決まっている。草履をはくのは三役格以上、足 袋は十枚目格以上で、幕下格以下は素足で土俵に上がる。また、立行 司だけは腰に短刀を差している。

行司の大切な役割は、対戦する2人の力士を立ち合わせるこ

と時間いっぱいになると両者の呼吸を見て、不十分なまま立ち合った ときには「待った」をして仕切り直しをさせ、勝負が公正に行われる よう、目を光らせる。立ち合ったら、力士が動いているときは「残っ た」、動いていないときは「はつけよい」と声をかける。「はつけよい」 とは、「発気揚々」からきた言葉で、両者が意気盛んに闘うよううなが すがす。どちらかのまわしがゆるんだときは、声をかけて動きを止め、 軍配の紐を口にくわえて手早く締め直す。勝負が長引いて水が入れ ば、同じ状態で再開させるために、微動だにせず両者の足跡をジッ と見つめる。どちらもあまりお目にかかれないが、行司の見せ場だ。

行司の世界

◆大相撲よもやま話◆◆◆◆◆



横綱土俵入りのせり上がりの際に軍配の房を回す、立行司式守伊之助。房の色は紫と白



勝負を裁く三役格行司木村晃之助。房の色は朱。勝負の邪魔にならないように気を配りながら、しっかりと勝負を見極める



十両土俵入りの先導を行う十枚目格行司の式守慎之助。十枚目格以上の行司は足袋をはくことが許される。房の色は青(緑)と白



令和7年七月場所初日前日、土俵の安全を祈願する土俵祭で祭主を務める立行司木村庄之助と、脇行司の幕内格木村元基、十枚目格木村行宏



「この相撲一番にて本日の」打ち止め。～」と結びの触れを行う立行司木村庄之助。軍配の房の色は紫



取組途中、「まわし待った」をかけてほどけかけたまわしを締め直す、幕内格行司式守錦太夫。房の色は赤と白



土俵に上がった力士の四股名を呼び上げる幕下格行司の木村悟志。幕下格以下の行司は素足で土俵に上がらなければならない

勝負がつけば、東西どちらか勝った力士のほうに軍配を挙げる。勝負結果に最終的な責任をもつのは土俵下に控える審判委員で、物言いがついたときには判定を一任するが、求められれば意見を言う。

ほかにも、横綱・幕内・十両の土俵入りの先導や、中入り後の「顔触れ言上(か おぶれごんじょう)」翌日の取組の読み上げ、新弟子たちの「出世披露」での言 上、土俵の安全を祈願する「土俵祭」での祭主としての務めなども、行司の大切な 役割だ。土俵の上ばかりではなく、場内アナウンスや、番附編成会議などの書記 も務める。相撲字の腕を磨いて、番附や顔触れの字を書くのも、大切な行司の仕 事だ。さらに、所属している各相撲部屋では、親方やおかみさんを助け、総務的な 仕事を務めることも多い。

華やかな土俵上の姿の裏には、縁の下の力持ちとしての頼りになる顔が隠され ているのだ。





◆ 七月場所の優勝力士 ◆ ◆ ◆

隆の里が千代の富士との
相星決戦を制して横綱昇進

昭和58年七月場所優勝 隆の里(東大関) 14勝1敗)

直前の五月場所です初優勝した関脇北天佑が大関に昇進し、2横綱(千代の富士、北の湖)5大関隆の里、若島津、北天佑、琴風、朝潮)時代が到来。このうち北の湖は腰痛で3場所連続全休となり、大関朝潮は初日から2連敗、新大関北天佑は序盤5日間で3敗して崩れたものの、残る1横綱3大関がそろって好調で、熾烈な優勝争いが繰り広げられた。

十三日目が終わったところで、1敗の首位が東横綱千代の富士と東大関隆の里、2敗は西大関若島津と西張出大関琴風で、残り2日間でこの4人が直接対決。隆の里と若島津、二子山部屋の2大関はそろって前場所13勝2敗で綱取りがかかっていたこともあり、いやがうえにも盛り上がる展開となった。

十四日目、まず1敗の隆の里と2敗の琴風が対戦。隆の里が頭で当たって琴風の出足を封じ、左四つに組み負けたものの、両まわしを引き付けて出て寄り倒し、1敗を守った。続いて結びで1敗の千代の富士と2敗の若島津が対戦。左四つに組み負けた千代の富士だが、浅く取った右上手を引き付けて走って寄り詰め、右を巻き替えた若島津を左上手投げから寄り切って1敗を守り、優勝争いは千秋楽結び、横綱千代の富士と大関隆の里による1敗同士の相星決戦にゆだねられることとなった。

隆の里は、右四つの豪快な相撲を磨き、昭和五十七年一月場所後、29歳で大関昇進。同年九月場所には全勝で初優勝を果たし、五十八年三月場所からは12勝、13勝と安定した成績を続けてきた。綱取りで迎えたこの場所は、順調に白星を積み重ねて九日目に単独首位に立ち、十二日目に新大関北天佑に寄り切られたものの、千代の富士と1敗で首位に並んで千秋楽を迎えた。勝って優勝すれば横綱昇進は確実だ。

そんな隆の里に立ちはだかる千代の富士は、横綱昇進から2年たつてすでに優勝8回。この場所は、右肩垂脱臼のため全休明けという不安を吹き飛ばす好調ぶり、ねじ伏せるような左上手投げが冴えて白星を積み重ね、九日目に西小結舩田山

に引き落とされた以外は白星を重ねていた。

両者の対戦はここまで幕内では、12勝9敗と隆の里がリード。映像を繰り返し見えて研究を重ねた成果で、一時期は8連勝したが、直近は千代の富士が3連勝と巻き返している。そんな注目の一戦は、右四つがっぷりから千代の富士が腰を振って上手を切ったが、隆の里は慌てず上手を取り直して再びがっぷりに持ち込むと、力強く吊って出て土俵際まで運び、右外掛けで崩して寄り倒し。約1分の濃密な戦いを制し、2度目の優勝を決めて場所後に横綱に昇進した。

30歳で遅咲きの花を咲かせた隆の里は、この場所から4場所連続で千代の富士と千秋楽相星決戦という、相撲史に残る死闘を繰り広げ続ける。新横綱の九月場所、20年ぶりの横綱同士の千秋楽全勝対決を吊り出しで制し、双葉山以来45年ぶりの新横綱全勝優勝を成し遂げて2場所連続3回目の優勝。十一月場所は1敗の相星決戦で敗れたものの、昭和五十九年一月場所は、2敗の相星決戦を吊り出しで制して4回目の優勝。その後は若手の台頭やヒジのケガなどもあって再び賜盃を抱けずに土俵を去ったものの、右四つがっぷりから吊り寄りで攻める豪快な相撲は、不知火型の力強い土俵入りとともに、ファンの脳裏に深く刻まれている。



5場所ぶり2回目の優勝を果たし、春日野理事長(元横綱栃錦)から賜盃を授与される



千秋楽、1敗の相星決戦で横綱千代の富士を力相撲の末に寄り倒して優勝決定。横綱昇進も確実にした

この場所の熱戦が
動画で楽しめる



日本相撲協会公式YouTubeチャンネルの「大相撲アーカイブ場所」で、昭和58年七月場所の幕内全取組の動画を公開中。メンバーシップ登録(月額990円)すると視聴できます。下のQRコードからアクセスしてください。



◆ 大相撲「モノ」語り ◆ ◆ ◆

幟(のぼり)

力士の四股名などが、番附などと同じ独特の相撲字で大きく染め抜かれた色鮮やかな幟は、本場所や巡業の会場や、相撲部屋の宿舍などに掲げられ、相撲情緒を大いに盛り上げてくれる。

本場所を立てられる幟のサイズは長さ5・4メートル、幅90センチ。後援者などから関取、相撲部屋などに贈られ、験を担いで1場所ごとに新調される。上部には軍配に「贈」の文字、中央には贈答先の力士の四股名や部屋名、下部には贈呈元の名が記される。色はさまざまだが、四股名は黒星を想起させないよう黒色を避ける。

江戸時代の勧進相撲で、興行の開催を知らせ、

盛り上げるために立てられるようになったのが始まりといわれる。明治42年の旧両国国技館の開館を機に本場所ではとりやめとなったが、終戦後間もない昭和27年一月場所、復興の機運盛り上げようと、まだ仮設だった蔵前国技館で復活し、それから70年以上にわたって親しまれている。

近年は、幟を模した力士応援タオルが本場所会場の売店などで販売され、客席で掲げる姿が多く見られ、相撲ならではの雰囲気盛り上げながら、最前力士への熱い思いを伝えてくれる定番応援グッズとして人気を博している。



令和7年七月場所、会場前に立てられた色鮮やかな幟

